

はじめに

わたしは一九三一（昭和六）年、埼玉県西部の町、飯能はんのうで生まれた。それは満州事変が始まった年でもあった。

東京教育大学経済学科を出て、埼玉県の公立高校の社会科教師になった。一九六二（昭和三七）年のこと、結婚して川越市民になったが、そこは自分も妻も高校時代を過ごした懐かしい町だった。

その川越は関東大震災にも、太平洋戦争による戦災にも遭わずに済んだところだった。おかげで太平洋戦争後の混乱期が過ぎると、優れた文化財がたくさん温存されている町として広く知られるようになった。

そこでは江戸時代から、優れた郷土史研究家が次々に出ていた。だが、江戸時代の後期から、江戸つ子が「本場もの」としたサツマイモについての本格的な研究者だけは、なぜか出ていなかった。

わたしは、それでもそれは誰かが、きつとやってくれる仕事だと思っていた。だが、その当ては外れた。いくら待っても、その気配けはいさえ出てこなかった。それで教職の仕事をしなから、自分がやってみるしかないかと思うようになった。そう、それは四十歳ごろになってからのことだった。

本書はそのような者が、次の二点に注意しながらいろいろ書いてみたものである。

一つは、最近の川越が、埼玉県の代表的な観光都市になってきたことである。毎年、数百万人も観光客が来てくれるにぎやかなところになってきた。

観光客は、その風土が感じられるものを求める。さらに、そこにしかない物を求めている。サツマイモで全国的に知られている川越ならではのものとなれば、食事でも、土産品でも、それがたっぷり使われているものになる。

だから川越観光の中心地、藏造りの町並みから菓子屋横丁にかけての一带は、それを扱う店で埋め尽くされている。そんな面白いところは日本だけではない、外国にもないから観光客は喜ぶ。その情景をマスメディアが見逃すはずがない。競って報道してくれている。

そのようなことにまでなってきた川越イモの文化史的な流れを、地元の人たちにだけではなく、観光客の皆さんにも知ってもらいたくなった。

そしてもう一つは、自分が食べ盛りだったころのわが国の、厳しかつた食糧事情である。その体験者の一人としての当時のさまざまな見聞を、戦後生まれで戦争を知らない世代のひとびとに伝えておかなければならないと思っている。そのような義務感がある。